

史実と伝説の間にみる役行者の魅力

立花 靖弘^a

^a 湘北短期大学

【抄録】

7世紀後半から8世紀にかけて生存した役行者は、初期の文献においてすでに伝説に彩られた人物である。現在刊行されている子ども向け本に、役行者を悪人とみる内容のものがある。この見方を批判し、民衆の立場から歴史的にみる必要性を述べた。役行者が古代社会のロマンを担う魅力ある存在であることを子どもたちに伝えたい。

【キーワード】

修験者 呪術 罪人 自由への渴望

はじめに

役行者という呼称は、役小角という名に与えた後世の尊称である。役小角は7世紀後半から8世紀にかけて生存した山岳修行者である。役小角が最初に文献に登場するのは続日本紀であり、次が日本霊異記である。いずれも伊豆への配流者として記されている。配流者という状況から彼を直ちに悪人とする立場の子ども向け本が現在も刊行されている。

たとえば、「熱海の昔ばなし 熱い海のものごたりに」では、

「むかし、文武天皇のころ（西暦699年）役行者（役小角ともいう）というすごい仙人がいました。この仙人は、鬼神を使って、水をくんだり、まきをわらせたり、そうじをさせたりする事ができました。そんな力のある役行者は、しだいにわがままになり都で自分

勝手のふるまいをして、都をさわがせたので、とらえられて伊豆の大島に流されました。」¹⁾
(下線、筆者)

となっている。小角をこのようにみる視点や悪人とした理由を批判的に検討する。

1. 役小角の罪状

(1) 続日本紀にみる罪状

小角にかんする正史の記述は「続日本紀」にある。そこに記述された文面での配流理由は、小角に師事した弟子「外従五位下韓国連広足」が、小角の呪術を妬み、人を妖惑していると讒言したことによる、としている。すなわち、呪術の力をもった者が人を妖惑しているという理由である。韓国連広足はいわば官職にある呪禁師であり、当時呪術は公認の行為であるから、呪術そのものの能力ではなく、その能力を使って「人を妖惑」したこ

とが罪となったということである。そこには妖惑を不都合なこととする大和朝廷の思惑がある。

(2) 日本霊異記にみる罪状

「日本国現報善悪霊異記」通称「日本霊異記」は、822年ごろ薬師寺の僧景戒が著わしたものである。この書に役小角は役優姿塞の名で書かれている。優姿塞とは、「在俗・有髪 of 男性仏教者をさして用いられる言葉」²⁾である。

「日本霊異記」に記述された配流の理由は、つぎのようである。

役優姿塞が鬼神を使役して橋をかけさせようとしたので、神々は困りはて一言主という大神が「役優姿塞が天皇を滅ぼそうとしている」と讒言したことによる、としている³⁾。

大和朝廷の思惑がはっきりした表現で記述されている。「続日本紀」は朝廷の意図による編纂であり、「日本霊異記」は一僧侶による著書である。

2. 「妖惑」への疑問

「続日本紀」に記された小角の配流理由が、小角があやしい言葉で人を惑わしているというのは、朝廷が小角を捕らえるための口実ではなかったか。小角は呪術者であったが、当時呪術は公認のごく自然に要求された行為であったことはすでにふれた。宮廷の典薬寮では医・針・按摩・呪禁をあつかっている。韓国連広足は呪禁師であり、のちに典薬頭に任じられている。

呪術を現代社会における行為としてみると、そこからいかにも非科学的な行為で「いかさま」であるというニュアンスを帯びてくる。そこで呪術が古代社会の自然に要求された状況をもう少し述べておく。

「日本霊異記」で役優姿塞(役小角)が修得したとされる孔雀の呪法は毒蛇を退ける力をもつとさ

れる。毒蛇とくにマムシは危険な存在であるが山中山麓ではありふれた存在である。マムシの頭部は三角形をしており、縄文時代の土偶には三角形の象徴的な頭部をもつものが出土している。たとえば、長野県・尖石縄文考古館の“仮面の女神”(重要文化財)がそうである(図1)。三角形の頭部は毒蛇への恐れと畏敬、安全への祈りと魔よけを象徴しているとされる。このように、自然への畏敬、恐怖や疾病から身を守り不安を解消するために呪術は望まれる施術であったろう⁴⁾。

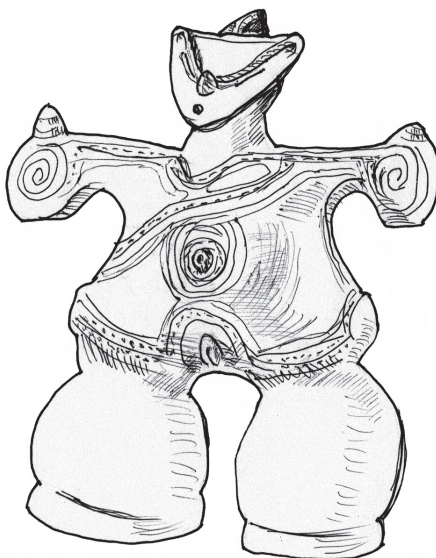


図1. 尖石縄文考古館の土偶“仮面の女神”
三角形の頭部はマムシの頭部からきていとされる。
自然への畏怖、呪術とのかかわりを暗示する。

小角の「あやしい行動」にさらに「鬼神の使役」がある。鬼神とはなにか。一つには人であり、もう一つは信仰上想定したものである。信仰上の想定については後述するとして、まず、前者について述べる。山は神々の住む霊地であり祖霊の住む他界あるいは危険に満ちた世界とされた。そのような山にも、獵師のように山中に住み生業を営む者がいた。山の神に仕える作法を知り、水の神・火の神とに通じ得たとされる存在である。これら

のいわゆる山人は里の農耕民からみると神に似た魔的な存在にみえるのである。小角も山人の部類であろう。

「鬼神の使役」に言う使役とは、「続日本紀」ではまきひろい水くみなどの作業であり、「日本霊異記」では橋をかけるなどの労働である。直接的な表現にはなっていないが、小角は典葉寮の韓国連広足の師であるから葉草の知識施術に長けていたであろうことが推測される。

これらのことを民衆の立場からみれば、小角は山人とともに労働し葉草の知識を活かして施術し、呪術をもって民衆の不安をとりのぞく行為をしていたとも想像されるのである。それではなぜ拘束され罪人とされたのであろうか。

3. 小角の自立と自律が恐れられた

小角拘束の直接的きっかけは、「続日本紀」によれば韓国連広足の讒言による。広足は外従五位下といういわば官僚の立場にあった。朝廷は社会制度として律令制度の貫徹をきして民衆の生活・行動をすべて掌握しておきたいところである。そのようなときであったために官僚による讒言から、小角の朝廷にへりくだらない不屈の姿勢を間接的に読み取ることができる。

朝廷は、小角が鬼神を使役するという行動力にも不安を感じていたであろう。小角は山中で鬼神とともに自立的生活をしていたと考えられる。室町時代末期の「役行者本記」以降の書物には前鬼・後鬼の存在が記されるが、前鬼の像は開拓のシンボルともいえる斧を持ち、後鬼の像は葉草・食料など糧をいれる壺を持っている。小角生存時もそのような自立的生活をしていたのであろう。

さらに鬼神にはもう一つ信仰上の想定、土着神・先祖神・氏神という意味があるとされる。そうし

た土着神を使役するということは、地域の古いしきたりや地縁血縁からの自律を意味している。朝廷は律令制下の村落諸制度の拘束から脱却するという自律を黙認することはできなかったのであろう。「日本霊異記」では一言主の神の讒言によって小角を拘束したとある。一言主の神は朝廷の守護神・土着神である。

4. 志を引き継ぐ行動・伝説・創作

(1) 道昭・行基・景戒

小角の行動は同時代の他の僧に何らかの影響を与えたであろうか。「日本霊異記」の著者景戒の目を通して道昭、行基への影響を推測する。「景戒の目を通して」とするのは、史料が主として「日本霊異記」などに限られるからである。小角の史実はとぼしいが、道昭、行基にかんする史料はある程度存在する。小角の生没年は不明であるが、701年からほどない時期に没したと推定される。道昭の生没年は629年～700年で、小角の推定生存期間とほぼ重なる。行基の生没年は668年～749年で、小角生存の701年のとき行基33歳である。景戒の生没年は不明であるが、自著「日本霊異記」に、787年ごろ俗家に住み赤貧であったと記している。「日本霊異記」を著したのは822年ごろとされる。

まず行基の修行場所、活動スタイルをみておく。行基は東大寺大仏建立などでよく知られた僧である。行基は若い頃、小角の修行場である葛城で修行した呪術者である。布教の呪術的性格のゆえにしばしば弾圧される。弾圧されながらも池水・土木・農事指導などの社会事業をやめることはなかった。民衆の厚い支持を得ているために、大仏建立で起用されたとされる。

行基は道昭の弟子で、道昭から葉師寺で法相宗を学んだとされる。道昭は遣唐使として入唐し玄

奘三蔵（三蔵法師）の教えを受け、わが国に初めて法相宗を伝えている。道昭もまた、井戸、橋を架けるなどの社会事業を行った。

景戒は、小角（役優姿塞）、道昭、行基を尊敬のまなざしで「日本霊異記」の中で讃えている。同書の中で景戒は、つぎのような話を書いている。渡唐した道昭が新羅で法華経を講じているとき役優姿塞を見かけた。そこで高座から下りて役優姿塞を探したというのである。行基の師であり法相宗をはじめて伝えた道昭すら役優姿塞を日本のすぐれた修行者としているありさまを、景戒は心情を込めて描いている。

史実の実像の薄い小角の像を、史実の比較のはっきりした道昭、行基に景戒の目を通して映した同書は、後世のさらなる伝説化への一歩であった。そこには事実の枠を超えて、民衆のなにがしかの共通する願望を込めて求めた真実への道のりがあったのかもしれない。

(2) 自由への渴望と怒り

小角は葛城に住む“土蜘蛛”の子孫と考えられている。「日本書紀」では葛城に住む先住民を“土蜘蛛”と蔑称で書いている。土蜘蛛を葛の綱で捕らえ殺したので「葛城」という名がついたという。“役（えだち）”は律令制度下における雑徭をさす語とされる。「日本霊異記」によれば、小角は若くして他に比べる者がいないほどの博学であったという。朝鮮半島伝来の知識にも通じ、石橋を架けるという伝説の根拠にもなっている。石橋を架けるには朝鮮半島からのすすんだ土木の知識が欠かせないからである。山中においては岩窟を居住とし薬草の知識を活かし粗食に耐え、山野を仙人の如くに自由に駆け巡った。このような様子からであろうか、仙人となって天空を飛び交ったという伝説が生まれている。

時代は6世紀の鉄の生産を中心とする「古代産

業革命期」を経て、壬申の乱後は中央集権化の強化とともに大宝律令の完成へと向かう歴史の転換期であった。山野での自由な行動など押しつぶす流れの中にあった。弱い母を人質にとられ自ら縄につき伊豆へ配流されたのであった。平安時代初期から新たに伝説に加わった、小角が感得したという蔵王権現は憤怒の像である。時代のままならぬ理不尽さに対する火を噴くような怒りを代弁しているかのようなのである。

5. 正史・妖惑・罪人—— 他の事例

(1) 17世紀の本草家カルペパー

小角は薬草の知識をもつ呪術者であった。薬草と呪術のかかわりを他の事例でみておきたい。呪術はしばしば「妖惑」として弾圧の対象になってきたが、薬剤をもって窮民救済を行おうとするとき、なんらかのやむにやまれぬ力に突き動かされて呪術をしたためではないかという問いを考えるためである。

小角の時代から10世紀も経て科学も産業も一段と進んだイギリスにおいて、本草家カルペパーは薬剤師にして占星術師であった⁵⁾。当時のイギリスにおいてさえ、薬剤による療法では、いまだ化学療法は皆無に近く、もっぱらハーブ、薬草によるものであった。また、科学が他の国より発達していたとはいえ、たとえばペストの定義は「人の罪に対する神の怒りの一撃」などというものであった。カルペパーは権力をもつ王権派、保守的な内科医師会からさまざまな迫害をうけた。ラテン語で書かれた内科医師会編の「薬局方」を、カルペパーはラテン語の読めない薬剤師のために英訳した「ロンドン薬局方」を発行した。それには、批判的に政治的コメントを付すという革新的な理念をもつ議会派の立場にたっていた。

また、「英語で書かれた療法」（いわゆるカルペ

パーの薬草大全)を廉価で刊行した。この著書で、民衆のために生活の中で工夫されてきた身近な薬草などを用いた民間療法がわかり易く詳しく解説されている。キリスト教が生活の規範になると考えられる状況において“妖惑者・いかさま師”という批判や迫害を受けながら、なお占星術師であったのである。診断治療はあくまでも医学的原則に則っておこなったのであるが、「治療は肉体を癒すものであると同時に魂を癒すもの」と考えていたという。たとえば「木星は平等を喜ぶ」といったたぐいの占星術を用いて、民衆が治療の結果を「時空・心身全体の合理性のもとに」納得理解できるように占星術を用いたという。医療において占星術は中心的なことではないのである。

役行者が呪術を用いて何のために何をなしたかなのである。

(2) 正史にみる反逆者・オヤケアカハチ

正史「続日本紀」で罪人とされた小角の立場は、同様な他の多くの事例でみることができる。その一つをとりあげ正史の視点と民衆の視点との相違をあらためてみておきたい。

琉球王府編纂の「球陽」に1500年に起きたオヤケアカハチの乱の記述がある。

オヤケアカハチは3年間入貢しなかった。尚真王はオヤケアカハチ鎮圧に乗り出した。46艘の戦船を遣わしオヤケアカハチを捕らえ処刑した。

すなわち、オヤケアカハチは王府の命令に従わなかった反逆者ゆえに罪人なのである。

しかし、民衆の立場にとってオヤケアカハチは英雄であり今に称えられている。沖縄・大浜村の崎原公園には頌徳碑が立ち、その碑文には、尚真

王が八重山に伝わるイリキヤアマリという伝統的な祭礼を「淫祠邪教として厳禁したところ島民は不当なる弾圧だとして、いたく憤激した。」アカハチは島民の先頭に立って尚真王の反省を求めて朝貢を両3年納めなかったことが述べられ、最後につきのように結んでいる。

「アカハチは封建制度に反抗して自由民権を主張し島民のため、やむにやまれぬ正義感をもって戦ったのである。戦いは利あらず敗れたけれどもその精神と行動は永く後世に光芒を放つことであろう。ここに碑を建ててもってその偉徳を讃えるゆえんである。」(1953年)⁶⁾

また、大浜公民館憲章には「アカハチの遺徳を重んじる村をつくります」と謳われている。民俗学研究者谷川健一は正史「球陽」におけるオヤケアカハチの記述とは異なる民衆による頌徳碑文は、「歴史が中央と頂点の権力によって偽造されていくことを否定する」「辺境に住む人びとのいつわらぬ心情をみる気がした。」⁷⁾と述べている。

正史「続日本紀」で罪人とされた小角を、権力者の視点からではなく、民衆の立場からどういう人物で何をなしたかをみることは歴史の真実探求に欠かせない視点であろう。

おわりに

(1) 役行者から100年後のある修験者とそれから1200年

役小角が配流された伊豆には、いまでも多くのゆかりの修行場跡が残る。その一つに伊豆山走り湯がある。役小角が走り湯で修行したとされてから100年後に修行した藤藏という名の獵師がいる。その後獵師藤藏は岩手県の早池峰山を開山した。

やがて早池峰山のふもとに遠野というまちができ
ていったとされる。2006年は開山から1200年にな
るといので記念行事があり、その行事に参画
する機会があった。役行者の徳を一人の修験者・
狐師藤蔵の行動のなかに想像し、そのゆかりを伝
えてきた遠野市の人々の自負を感じるものであつ
た⁸⁾。

(2) 役行者を素材に格闘した坪内逍遙

明治大正期の劇作家・坪内逍遙は、役行者の生
きざまをモチーフに逍遙自らの思想的修行をおこ
なった。それは同じモチーフで4種類もの創作劇
をつくった過程に示される。その代表作に「役の
行者」⁹⁾があり、最近筆者はその上演にかかわつ
た。¹⁰⁾

(3) いまに問いかける真実の探求

役行者の魅力は、史実という「事実の探求」の
枠を超えて、その時代の制約のなかでもなお「仙
人のように自由に時空を飛びたい」という憧憬を
もちつつ、権力におもねることなく自立と自律の
気概をもち謙虚で厳しい自己修行をする過程に、
人間の、社会のありようを求める「真実の探求」
を重ねることができるところにあるのではない
か。それを伝説や創作という形態のなかにも見出
すのである。そのおもいは現代において日本国憲
法のなかにも集約的な表現で示されている。

「この憲法が日本国民に保障する基本的人権
は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成
果であって、これらの権利は、過去幾多の試
練に堪へ、現在及び将来の国民に対し、侵す
ことのできない永久の権利として信託された
ものである。」(日本国憲法第97条)

自由を求めた古代社会のロマンは、古くて新しい
問いをなげかけている。

資料収集に関し本学図書館職員のみなさんには
並々ならぬお世話をいただいた。ここに記して謝
意を表する次第である。

参考・引用文献

引用文献にはそれを明示する

- 1) 熱海青年会議所創立50周年記念事業部会編「熱
い海のものがたり」(2006) p.66 引用
- 2) 宮家準編「修験道辞典」(東京堂出版、2000) p.23
引用
- 3) 宮家準「役行者と修験道の歴史」(吉川弘文館、
2004)
- 4) 谷川健一「魔の系譜」(講談社学術文庫、2006)
- 5) ベンジャミン・ウリー(高儀進 訳)「本草家カ
ルペパー」(白水社、2006)
- 6) 大浜村誌編集委員会編「大浜村誌」(大浜公民館、
2001) pp.187-188 引用
- 7) 上掲書4) p.186 引用
- 8) ・立花靖弘「史実と民間伝承のあいだ」(湘北短
期大学紀要、第27号、2006) pp.69-76
・熱海新聞「早池峰夏の学校 遠野との懸け橋に」
2006年7月31日付記事
・岩手日報「1200年機に早池峰交流」2006年8
月2日付記事
・伊豆・早池峰こども交流実行委員会編「早池峰
夏の学校」静岡新聞社・静岡放送後援
独立行政法人国立青少年教育振興機構子ども
ゆめ基金助成活動(実行委員会代表、立花靖弘、
2006)
- 9) 坪内逍遙「役の行者」(岩波文庫、1992)(久松潜一、
伊藤整、福田清人 編「少年少女のための現代
日本文学全集」7巻、東西文明社、1956)
- 10) 坪内逍遙原作 立花靖弘監修「役の行者」(劇
団「いず夢」(座長 藤田弓子)、2007)

Ennogyoja's Attractiveness Lying Between Historical Facts And Legends

TACHIBANA Yasuhiro

[abstract]

Ennogyoja, who lived from the latter half of the 7th century to the beginning of the 8th century, was the man whose life was written with some legends in the early literature. Today, in some books for children, he is described as a bad person. This paper criticizes this idea and expresses the necessity of examining him from historically different angles through the eyes of the populace. This paper aims to tell children that *Ennogyoja* was an attractive man who sought for mentally and physically freedom in the ancient times.

[key words]

a mountaineering ascetic, incantation, a lawbreaker, seeking for freedom

